

句
遊

第十二集

平成二十七年三月

序に代えて

宮川 至 剛

前回の第十一集の発行から早くも二年が経過して、ここに「句遊」第十二集を皆様のお手元にお届けすることになりました。

平成二十五年四月から二年、句遊会会員のそれぞれが年輪を重ねるとともに、美しい日本語の風景への愛を深め、研鑽を積んできており、皆様が今回の句集、中々楽しい良い句集になったとお読みくだされば幸甚です。

月に一度の句作という遊びの中に、私たちは大和言葉の雅に触れ、一七文字の言葉の綾を楽しみ、また句会での互いの句の口誦の中で、時にその句のリズム感を称えあうのです。

シェークスピアは英語の語彙四万語を駆使できたようですが、森鷗外の語彙は四十万語あったと言われています。大和言葉のベースの上に漢籍を取り込

み、擬音擬態語にも豊富な日本語には尽きせぬ奥深さがあります。

生涯学習部会「句遊会」に相応しく

老いてこそ言葉豊かに年迎ふ
多摩子
の心根で齢を重ねて参りたいと存じています。

(付記)

平成二十五年、二十六年 度句遊会の活動状況

月例会：平成二十五年三月が第二百七十七回

写友会、画友会との合同展

第二十回合同展 平成二十五年 五月

第二十一回合同展 二十六年 三月

第二十二回合同展 二十六年 十一月

吟行句会：平成二十五年六月 忍野八海・道志村

平成二十五年十月 小石川植物園

平成二十六年三月 湯島天神

平成二十六年六月 千葉県鴨川海岸

目次

満天の花火	石野喜粹	六
落日暉	生江沢広雄	八
月天心	六川里風	一〇
潮の目	清家静楓	一二
小さき合掌	佐藤政百	一四
美しき嘘	宮川至剛	一六
家族のことなど	眞田宗興	一八
光る肌	森邦彦	二〇
一万歩	勝田冬川	二二
ゆらぎ	中山知祐	二四
切符	大仲正敏	二六
鎮魂	石原克己	二八
風薫る	安井正浩	三〇
ふしだらなチューリップ	城戸崎雅崇	三二
句碑の道	石原尚文	三四
はつゆめ	鈴木充郎	三六

作

品

五

満天の花火

石野喜粹

童謡を歌う親父の初湯かな

有難や子も親となり年酒汲む

去年今年過ぎゆくものは吾身なり

寒の明け響く男声合唱団

春一番放置自転車なぎ倒す

赤レンガ東京駅へつばめ来る

初夏の風新歌舞伎座の幟かな

満天の花火を映す大河かな

街は今祭りの山を迎へけり

夏の潮仁右衛門島へ手こぎ舟

洛北の瀬音床しき夏料理

盆の月竹馬の友の名も尽きぬ

法師蝉寺のお経に合唱す

瀬祭のあまき夢見し夜長かな

悪い友だけれど懐かし落葉道

赤い灯や時雨の神田ガード下

白菜の俎板までの重さかな

口福やすするひれ酒ふぐ雑炊

落

暉

生江沢 広雄

和やかな弥陀の光や初日の出

天餌足り今日も来たらず寒雀

音もせで降る雨雪に変わりけり

雪残る谷戸の緑の薄化粧

天神の梅の香ほんのり女坂

風花や舞ひ散る星を手のひらに

風薫る江の島沖の白帆かな

鎮魂の千鳥ヶ淵の花筏

春昼や半眼開く仏たち

鳶の舞ふ鎌倉山や梅雨晴間

城山に声透り行く法師蟬

橋涼み宵の明星見つけたり

日々過ぎて新涼の風吹き透る

月天心古城の壁の白さかな

秋天や一塊の雲悠々と

江の島の海泡立ちて時雨来る

冬木立茅葺き屋根の一軒家

遠山の落暉眼を射る冬至かな

月 天 心

六 川 里 風

余生なほ励むことあり年酒酌

枝先に光を集め辛夷咲く

紅梅の匂ひの風となりにけり

幾筋の襷に残雪八ヶ岳

満開の三百本の梅日和

天上の威力さだかにはたた神

おやしらず疼きて梅雨に入りにけり

浦々にカンナの花の燃ゆる能登

能登の海見ゆるも一品夏料理

居ながらに滂沱の汗の日々となり

秋風やアルパカ撫ずる子等の居て

芋虫やひねもすごろり葉の上に

林檎挽ぎその枝空に返しけり

白樺の幹のささくれ冬ざるる

待ちかねし風呂吹き大根煮ゆる音

月天心風の抜けゆく冬木立

白菜のびしびしと音漬けこまれ

短日や一駅ごとに闇深く

潮の目

清家静楓

昼過ぎてぬるめ加減の初湯かな

寒月や車庫入り待ちの終電車

長考の一手の響く寒の内

切通し下れば湯島梅香る

潮の目の豊予海峡風光る

変幻に風の手編みの花筵

春昼の矢切の渡し艀がきしむ

待ち合わせ花アカシアのポスト脇

葉桜や宴に酔ひし夢の跡

万緑や八つの浮き富士おしの海

間歇の遠雷止まぬ地平線

恋を知り赤きカンナの花咲きぬ

法師蟬人の気配の無き社務所

旅の宿眠れぬ夜長鹿おどし

群青の秋天仰ぐ富士の山

湯めぐりの素足の下駄に秋惜しむ

短日や縁側に出て爪を切る

さよならに振り向きもせず冬木立

小 さ き 合 掌

佐 藤 政 百

陽を落す黒き田水に浅き春

残雪の足跡空ける獣道

紅白の梅のかたらひ聞こゆかな

微笑みの雛の眉の二日月

姉妹猫毛づくろひ合ひ春の昼

飛翔ひしやう低空縦横つばくらめ

櫂させばくづれて渦の花筏

花明りおつとととと酒こぼる

碧天や辛夷の花を吸い込みぬ

路地の朝いづこともなく沈丁香

風に香やアカシア万朶花の空

雨に咲き雨に唄うや濃紫陽花

旅の途の瀬音も一品夏料理

気だるさの中で一息心太

カルストの万古の礁やすすき波

園児らの声かしましやりんご狩り

母まねて小さき合掌七五三

疾風の落葉くるくるくるるる

美しき嘘

宮川至剛

祝き歌を嘴よりこぼし初雀

忘れぬし空ありにけり初景色

風狂と言はれ寒月仰ぎゐる

公魚の棲む湖にある逆さ富士

巻きゆるぶ羊歯のにこ毛に風光る

たまゆらの風に透きけし糸桜

どこまでが春の愁ひや思惟仏

薫風に素つぴん素足かがやけり

山の端にたちまち崇し雪解富士

海見るは海恋ふ人の夏帽子

美しき嘘諾へりサングラス

風立ちぬ太古の蓮のひらくとき

泥に生れ一茎高し白蓮

ひとくちのうすくちしやうゆ冷奴

木犀の闇やはらかに香を纏ふ

ただ眺めゐるを贅とし秋の雲

深くふかく宮司の二礼神の留守

漬樽を埋め白菜の尻高し

家族のことなど

眞 田 宗 興

春寒や地下工場の線路跡

母ありて子も孫もありわが春よ

禿比べ白髪比べの花見かな

若葉良し空も良し仰向けに寝る

携帯はいじめの道具か梅雨近し

夏雲やわれ行く道の先にある

逆上がりできた孫に大アイス

夏日落つ町名分けたる裏小道

通勤の人の中から夏が去る

妻共に夏の終わりの雨を聴く

獅子舞の鼻の穴から故郷が

弟七回忌小さな寺の萩の花

踏切の鼻欠け地藏女郎花

多摩川の右も左も芒かな

芒野のまん真ん中に富士の山

冬晴れや空に負けない青テント

年の瀬や私の居るところちよとだけ

年越しや兄のいのちの凄さかな

光
る
肌

森
邦
彦

光る肌スポーツジムの初湯かな

寒月や水煙そびゆ八坂の塔

宍道湖や公魚美味し日が沈む

風光り替へし昼の青さ映ゆ

春の昼瀬戸の海越え讃岐路へ

薄紅の枝垂れ葉桜風に舞ふ

夏燕空切る一閃世を覚ます

鳶群舞夏草茂る仁右衛門島

夕焼けが朝日となりて白夜明く

葉の失せし茎に芋虫したり顔

肌のしわ幾度の秋ぞプラタナス

秋空に改札ひとつ津波跡

七五三慣れぬ着物に足とられ

山寺の落葉敷く道岩迫る

闇出れば紅葉の錦鳴子峡

冬木立白木まぶしき伊勢の宮

鍋の味集めて締めはおじやかな

吉野山蔵王堂より暮早し

何かものたりぬ句が多い。単なる景色の描写に終わらず、季語を背景に面白い句を目指したい。

一 万 歩

勝 田 冬 川

初夢を獏に食われて覚めにけり

平常心持ちて生きたし去年今年

武蔵野の夕映え続く寒の内

花の笑み声あげはしやぐ園児たち

訪へば眠き声聞く春の昼

庭先を占めて今年も辛夷咲く

馬走る牧のあけぼの風薫る

まなうらに盛り残りて葉桜に

橋くぐるほろ酔いもよき涼み船

野の香り集めて京の夏料理

紫の風立つ如し花菖蒲

夕涼み舞妓の帯の濃むらさき

恙無く家族で仰ぐ盆の月

ありし日の母の愛せしカンナ燃ゆ

一万歩軽く終りし今朝の秋

犬供にひととき憩う朝時雨

あつあつの朝の一椀大根汁

小春日や気持ちはればれ一万歩

ゆ ら ぎ

中山知祐

今年から孫も挑戦屠蘇仲間

冬の朝トラックの列日に進む

寒月を背負ふ夜道の遠さかな

天満様梅絵馬人のにぎやかさ

校庭の一本桜決意押す

雑草をむしるも楽し春の庭

紅いくすぢ三春の里の滝桜

鯉のぼり見上げる坊やも手に一つ

てこぎ船初夏のきらめく波を裂く

碧き池めぐりて紅の雪の下

水草に浮かびあがり魚の影

けだるさを破る夕顔白き花

草いきれ青き臭いの衝撃波

赤々と夕陽とカンナ天と地に

突き抜けるツクツク法師真昼裂く

檻褸を刺す母の背中に夜長見る

生き急ぐ秋の毛虫の和毛かな

林檎むく皮の厚さや新所帯

切符

大仲正敏

寒月の市場の上に鎮座せり

野菜高妻のためいき寒の内

雨戸開く手をすり抜ける余寒かな

花に酔い夢に酔いつついつの間に

残雪を振り返り見て駅舎かな

春の昼猫の欠伸に口を開け

辛夷咲く空の青さの透き通る

風薫る想ひふくらむ旅支度

待ち合わせ胸のときめき緑雨かな

お囃子が階下を過ぎて夏料理

自家製のゴーヤを前に話好き

流行なる本屋大賞夜長かな

人力車金髪揺らし秋の空

ジャズダンス老ひの伸び代竹の春

七五三スマホ登録他人に見せ

写真撮る鳥も逃がして暮早し

ゆつたりと橋を渡りて月冴ゆる

初天神願いをこめて汁粉吹く

秩父鉄道の御花畑駅では、未だに厚紙の昔ながらの切符が売られています。西武線の秩父駅で乗り換えて、長瀬や三峰口へ行くとき、少し歩くと御花畑駅に着きます。手に温もりの残る一枚の切符が旅の始まりでした。

鎮 魂

石原克己

歓声も祈りも染めて初日の出

寒月を映して眠る蔵の街

寢床から時計幾度も寒の朝

登校の声もはずみて風光る

影写しつばめ音なく田をかすめ

散りてなほ命雅や花いかだ

山門を洗うがごとし糸桜

アカシアや薄暮にかをる花の白

万緑に手足染め上げ道志の湯

夏富士の湧き水飛ばす水車かな

うつわ愛づ正座自づと夏料理

木犀の香り読経の仏間まで

沢筋に紫紺も深き鳥兜

本閉ぢて猪口になみなみ長き夜

秋空や黒部の流れ谷深く

落ちる陽に浮かぶ影絵の冬木立

山の端に冬の月見る出湯かな

鎮魂の御嶽しんと冬に入る

風 薫 る

安 井 正 浩

悔いのなき生を願ひつ屠蘇を酌む

ビル街の狭間を昇る寒の月

湖暮るるわかさぎ釣りの灯はやさし

寒明けの波鬨ぎ合ふ船溜まり

対岸の埠頭の染まる寒夕焼

永き日の落日遅々とビル染める

燕来て大棧橋を旋回す

しばらくは花に隠るる花見船

初夏へ豪華客船出航す

風薫るベンチに伏せし文庫本

葉桜となりて大樹は安堵せり

卯波立つ安房の海背に真砂女の碑

花海桐安房と鎌倉古き縁

この村は居心地がよし夏つばめ

黄昏のカンナちからを抜きにけり

風に覚め風にまどろむ涼新た

霧襖開けて名も無き山頭るる

地下を出て不意に影伸ぶ日の短か

ふしだらなチューリップ

城戸崎 雅崇

年立つやおろした靴のはき心地

猫のやうなあくびする人初電車

ふしだらなまでに満開チューリップ

うららかや路上にモデル撮影中

木漏れ日を集めて白し著莪の花

風薫るポップコーンのカップ手に

風荒き磯につくばふ浜昼顔

イーゼルを覗かれてをり五月晴

人波を抜け出してくる夏帽子

かぶらずに出て帽子買ふ炎暑かな

新蕎麦の幟にひかれ昼の酒

歩く人駈けぬける人秋の風

行く秋やみな小粒なる群雀

着膨れて石段ひとつ踏みはずす

駅広場人待つ間の日向ぼこ

病棟の看護師たれも大マスク

短日や泣きつつ母に口答へ

冬の湖釣船黒き点となり

俳句を始めて4年目。最初はビギナーズ・ラックもあったが、その後長い沈滞期(?)に入る。それでも「座」の楽しさにひかれて懲りずに続けていると、最近では再び前進が可能なのかも知れないと錯覚することもある。

句碑の道

石原尚文

左義長に貌煌々と夜明け前

寒の内息を潜める京町家

石庭の趣変へる残り雪

辛夷咲く甲斐へつながる戦道

天空を鉦切りにする初燕

老いてなほ心に疼く桜貝

春昼を無為に過ごせる至福かな

肩書きをなくして軽き初夏の旅

葉桜や喧噪の韻残しをる

緑陰の老婆語りし島歴史

夏草をかきわけ進む句碑の道

遠雷に両耳ぴくりドーベルマン

慎みて喪の家照らす盆の月

芋虫や隣の人を知らぬまま

秋蝶や無明の闇をゆらりゆく

千枚の稲田刈るなか茶髪の子

初時雨友哀悼の序奏曲

湯豆腐や話し半分顔半分

は つ ゆ め

鈴 木 充 郎

はつゆめを待つ子の寝顔愛らしや

めぐりくる幸も不幸も去年今年

寒月や灯り点滅摩天楼

春浅しえり立てて吸う喫煙所

母の待つ施設の庭に辛夷咲く

筍が旬のお薦めお品書き

葉桜に宴の後の風抜ける

陽光に大蛇のうねりつつじ燃ゆ

雷鳴に蜘蛛の子散らすスクランブル

夕顔に秘めたる思い語りたし

納涼は図書館年金おやじ族

法師蟬工事現場に負けず鳴け

灼熱の街路樹のうえ鳥鳴く

芋虫や動くマシユマロ翅をもて

赤い実の絵の具ちりばめ林檎園

二人抜くジョキング後に新酒飲む

葉が落ちて細身をさらす社の樹

短日の影の容姿に見とれおり

あ と が き

月一度の句会を続けてきた本会は、創会以来二十五年の月日が経過し、本年二月、第三〇〇回の句会を開催いたしました。

本会は創会以来特定の指導者を置かず、会員どうしが月々二つの兼題と当季雑詠の三句を投句し、互選・講評等で、活発な議論が行われ楽しい座が持たれています。

吟行句会は平成二十五年、二十六年にそれぞれ二回づつ行い、内一回は一泊吟行でした。今後とも年二回の吟行は続けてゆきたいと思っています。

この楽しい句会の座に新たな会員の入会を歓迎いたします。

本集への出品は十六名で、前集より二名減となりました。編集に当たり、出品は従来通り、自選十八句とし、前書きルビは原則として付けておりません。また、前集に続き、作品のあとの余白に、自由に短文を書いていただくこととしました。

次集第十三集は、平成二十九年を予定しております。

会員の皆様の一層のご協力をお願いすると共にご健吟をお祈りいたします。

平成二十七年三月

編集委員

清家 静	石原 克己	佐藤 政夫	森 邦彦	安井 正浩	佐藤 政夫
------	-------	-------	------	-------	-------

(佐藤

記)